



本日はよくお参り下さいました

桜の便りが、次々に聞かれるようになりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。お花見の季節ですが、このところは、桜の飾りつけをした店内でお酒を飲む、「エア花見」というものが流行りだそ



うです。防寒対策や場所取りがいらないことも人気の理由だそうです。さて、このひと月のニュースの中で特に盛り上がったのは、稀勢の里の横綱初優勝のニュースではないでしょうか。負傷した翌日も、あきらめずに出場し、優勝した稀勢の里は、真の横綱でした。早くケガが治ってほしいですね。さて、四月は新年度が始まります。心機一転、がんばる事も大事ですが、平常心を保ち、規則的な生活を送ることも、実はとても大切なことだと思う今日この頃です。今月も皆様のご多幸をお祈り申し上げます。権禰宜 道子

4月

1日・15日 月次祭(つきなみさい) 皇室の弥栄と国家安泰、氏子崇敬者並に社会の幸福と平和を祈る。

4日 清明(せいめい)清明は「清浄明潔」を略したもので、「万物ここに至って皆潔斎(けっさい)なり」と称されるようになりました。春先の清らかで、生き生きとした様子といったものです。

20日 穀雨(こくう)穀雨とは、百穀を潤す春雨をいいます。この頃は、春雨のけむるがごとく降る日が多くなり、田畑を潤して穀物などの種子の生長を助けるので、種まきの好機をもたらします。

29日 昭和の日 昭和天皇の御誕生日であるこの日は、平成元年に「みどりの日」として祝日となりました。しかし、その趣旨は昭和天皇の御事蹟を顧みるにはほど遠いものだったため、多くの国民の強い要望をうけて、「昭和の日」が施行されたのです。昭和天皇は、御生前に自然をこよなく愛されました。生物学者であられただけでなく、敗戦によって荒廃した国土に緑を取り戻そうと、昭和25年から始められた全国植樹祭では毎年各地を精力的に巡られ、御親(おんみずか)ら苗を御手植えになりました。その御心は今上陛下に受け継がれ、国土緑化、ひいては鎮守の森の再生発展に繋がっています。ゴールデンウィークの最初の祝日、「昭和の日」。昭和天皇の御事蹟に思いを馳せつつ昭和の時代を振り返る日です。



天神さまの豆知識

—お花見は祈りをこめて—

お花見が現在ののように、敷物を敷いて一席を設け、花を愛でながら飲食を楽しむようになったのは、江戸時代以降のことです。八代將軍徳川吉宗が、飛鳥山や隅田川の土手に桜を植樹したことがきっかけとなり、庶民も気軽に花見を楽しむことができるようになりました。桜色、白、緑の三食団子が広まったのも、江戸時代です。このような花見の風習はもと農作業の開始の目安となる桜の開花にちなんで行われてきた農耕儀礼が発展したものだと考えられます。「桜」という言葉の語源を見ると「サ」は「稲の霊」「クラ」は「神座」を表すといわれています。つまり、古代の日本人は桜の花に神威を見出し、咲き具合によってその年の吉凶を占ったというわけです。花見の宴には、豊作を願う人々の想いが込められているのです。一方で、桜は満開となるや、すぐに散ってしまいます。古代の日本人はこれを不吉と捉えました。花が散り、舞うときに疫神もともに分散し、疫病をもたらすと考えたのです。現代のように医療技術が発達していない古代にあって、病はいとも簡単に人の命を奪いました。また、それは生命の糧である稲にも及びました。そこで疫病の流行を防ぐため、桜が飛散する時期に鎮花祭(ちんかさい)が行われました。平安

時代に制定された『神祇令(じんぎりょう)』(公的な祭祀の大綱を規定)には旧暦三月に鎮花祭を行う旨が記されており古来重要視された祭りであることがわかります。現在も奈良県の大神社(おおみわじんじや)を始め各地の神社で鎮花祭が行われています。参考 『神道としたり事典』 茂木貞純監 修PHP研 究所発行



花鎮(はなしづめ)の祭りともいいます

今月の言葉

『伏すこと久しきは、飛ぶこと必ず高し』

菜根譚より

長い間うずくまっつて力を蓄えていた鳥は、いったん飛び立てば、必ず高く舞い上がる——一見歩みは遅いように見えるが、一度チャンスをつかむと存分に力を発揮して一気に遅れを取り戻す。こういった晩成型のタイプは、たとえ逆境にあらうとも、目前の利益にこだわらず、将来に備えて、じっと力を蓄えていけばよい。必ず力を発揮できる時がくるのである。参考文献『中国古典一日一話』 守屋洋著 三笠書房発行